

# ラグビーの歴史

## ——その起源と発展について——

秦 修 司

### A History of Rugby Football ——It's Origin and Development——

Shuji HATA

#### I 本研究の目的

ラグビー・フットボール（以下、ラグビー）のparent gameと言われるゲームの起源は大昔に溯り、それについては軽視することはできないが、マーシャル師<sup>1)</sup>によってラグビー校<sup>2)</sup>がその名前を生んだゲームの発祥地であることが明らかになった<sup>3)</sup>。

ラグビーの起源についての正確な日時やどのようにしてできたかについては、極めて問題の余地があるが、ラグビー校OB会の小委員会<sup>4)</sup>によって調査された1820年か1830年代に、誰かがただ単にボールをキャッチしてキックせずに、ボールを持って走ったという事実は否定できない。

本研究は、ラグビーのゲームがどのように生まれ発展していったかを文献より、ビクトリア朝<sup>5)</sup>以前、19世紀前半、19世紀後半の順で明らかにしようとしたものである。

#### II ビクトリア朝（1837—1901）以前

最初に明らかにしたいことが一つある。それはこういうことである。古代中国人はラグビーを行わなかった。ギリシア人もラグビーを行わなかった。中世のガスコーニュ人、チュートン人、トスカナ人、サクソン人、ポーランド人、スイス人、ブルガリア人又はフィンランド人もラグビーを行わなかった。ブリテン人より先に

は誰もラグビーを行わなかった。

先ずこのことを明らかにしたい。というのは、ラグビーの書は、必ずと言ってよい程、起源と呼ばれる章から始まるが、それは極めて退屈なものであるからである。

それらの書は、一種のハンドボールと思われるハルパスツーム<sup>6)</sup>を英国駐留のローマの軍隊がどのようにして行ったかについてとりとめなく語っているが、ハルパスツームはラグビーではない。

ある歴史家は、ウィリアム・ボーモン<sup>7)</sup>ト（1473—1550）著のAnatomie of Idlenessの中でのフットボールについての言及に重要性を持たせている。

One gayme veritably is a pastilence, wherein do lusty blaggards vent their beastely furie in dispewt over an leathern lumpe, and hereof groweth much bruising and murther, the cause of great rancour and malice, especyally when Bristol play Gloucester in a cup-tie; (ゲームは悪疫そのものであるが、そこでは敵丈ならず者たちが皮の塊を奪い合って激しい怒りをぶちまける。そのために、打撲傷<sup>8)</sup>や殺傷が生ずるが、特にcup-tieでブリストルがグロスター<sup>9)</sup>と試合するときには大きな遺恨、悪意の原因となる<sup>10)</sup>)

この記述を約15世紀に、フロント・ローが喧嘩をしていたという証拠として引用する人々は次の事実、つまり、最後の八つの語が後世に

なってespeciallyと正しく綴ることのできなかった誰かによってつけ加えられたとした多くの専門家によってその信憑性を疑われたという<sup>19</sup>事実を見過ごした。

ラグビーについて年代記作者が必ず採り上げる他のものに告解火曜日のフットボール<sup>19</sup>がある。このフットボールはチェスターやダービーのような退屈な地方では楽しい娯楽としてよく行われたようである。しかし、告解火曜日のフットボールがラグビーと何か関係があったという証拠は全くない。しかしながら、ハーレー彗星の最初の観測以来、各年、ネプネット・スルブウェル<sup>19</sup>のサマーセット・ビレッジ<sup>19</sup>において奇妙な儀式<sup>19</sup>が取り行われている。ミドルセックス・セブン<sup>19</sup>が終ったあとの第五番目の日曜日に15名の村人たちがハイ・ストリート<sup>19</sup>の一方の陣地に集まって、「ノック・オンだぞ、レフリー！」と叫ぶが、別の15名が、もう一方の陣地で、「それなら、オフサイドはどんなんだ」と叫び返す。そのあと、彼等は全員、その場を去って、酒を飲み交すのである。

この奇妙な儀式の理由は不明であるが、とにかく、ラグビーは告解火曜日のフットボールを継承しなかった。ビクトリアが1837年に即位するまではラグビーのゲームは存在しなかったと見なしてよい。

### Ⅲ 19世紀前半

又、明らかなことは、19世紀前半でのフットボールのゲームではハンドリングはほとんど無かったということである。プレイヤーはボールをキャッチしたら、マークしてドロップ・キックかブレイス・キックでゴールを狙ってよかった。しかし、ボールを持って走ることは許されなかった。1857年に出版されたTom Brown's Schooldaysの作者であるトーマス・ヒューズは1834年から1842年までラグビー校に在学していたのであるが、彼はラグビー校OB会への意見書の中で次のように述べている。

私がラグビー校に入学した最初の年の1834年、トライを得るためにボールを持って走り

込むことは全く禁じられてはいなかった。しかし、当時のラグビー校の生徒の陪審は、たとえ、少年の一人がボールを持ってゴール・インしたために殺されたとしても、「正当な殺人」<sup>20</sup>として判決するだろう。

さらに印象的なのは、ヒューズのTom Brown's Schooldaysの中でのゲームについての記述である。ライン・アウトにおいて突進があるが、ボールは、「スクール・ラインを真直ぐに突破する(right through the School line<sup>20</sup>.)」。弟のブルークが、「ボールに肉薄し、(close upon it<sup>20</sup>.)」、そして、「スクールのゴール・ポストに向って真直ぐに、(straight for the School goal-posts<sup>20</sup>.)」走る。弟のブルークは相手のタックルをはずす。「そして、今や、彼はスクールのゴールに肉薄し、ボールは彼の前方3ヤードと離れていないところにある。(And now he is close to the School goal, the ball not three yards before him<sup>20</sup>.)」ディフェンスは彼を阻止することができない。つまり、「誰も得点を阻止するための唯一の方法だったボールに飛び込むことをしない。弟のブルークはスクールのゴール・ポストの真下にボールをタッチ・ダウンした(no one throws himself on the ball, only chance, and young Brooke has to touch it right under the School goal-posts<sup>20</sup>.)」。

ヒューズはハンドリング攻撃については記述していなかったようである。ライン・アウトとタッチ・ダウンは別にして、弟のブルークがボールをドリブルしてディフェンスを抜いていっているの、そのゲームはより現代のサッカーのゲームに似た感がある。しかしながら、ボールを持って走ることは、1830年代後半になってより普及し始め、1940年代にはそのゲームの規則を制定しようとする試みがいくつかあった。例えば、ランニング・イン(running-in)、つまり、得点するためにボールを持ってゴールに入ることが、次の条件を満たせば、オン・サイドの位置にあるプレイヤーが、ボールをワン・バウンドでキャッチし、そのプレイ

ヤーがボールを手渡すことをせず、走り込んで自分で得点するならば、許された。地面からボールを拾いあげることは反則であった。しかし、パスというのは何世紀もの間、様々な地方でのハンドリング・ゲームの特徴であったので、ボールをパスすることができなかったというのは理解し難い。

37ヶ条から成るラグビー校でのフットボールのゲームの規則が、1846年12月7日のレバー・オブ・ビックスайд<sup>29)</sup>によって裁可された。その中で興味深いものがあるが、例えば、

#### 第7条

投げる (throw on) と区別されるノック・オン (knock on) は、いかなる場合においても全く許されない。この規則が破られた場合、このようなノック・オンからの捕球は正当な捕球と同等になる。

ここで言うノック・オンは現在意味するところのノック・オンを必ずしも意味しなかった。当時、「拳によるパント<sup>29)</sup>は、ウェストミンスター校などで行われていたフットボールでは許されていた方法であった。拳によるパントは、現在、オーストラリア式フットボールにおいて用いられている技術であるが、第7条でのノック・オンが意味するのは、多分に、この拳によるパントであろう。

#### 第13条

脛を蹴ると同時につかむことは正当でない<sup>30)</sup>。換言すると、脛を蹴るか又はつかまえることは許されたのであろう。

#### 第14条

踵で脛を蹴ってはならない。又、膝より上<sup>31)</sup>を蹴ってはならない。

#### 第15条

靴の裏又はかかとに突出した釘や鉄板<sup>32)</sup>をつけているものはプレイすることは許されない。

#### 第32条

二人のプレイヤー間でボールを真直ぐに送り出そうと協定することは許されない<sup>33)</sup>。

これは奇妙である。二人のプレイヤーというのは二人のチーム・メイトか又はプレイヤーとその相手間の協定を意味したのか？いずれにせ

よどんなことが生じたか、又は何故、そのようなことが生じたかを理解し難い。

#### 第24条

木に向かって直接ボールを蹴りあてたりボールを持って木に触れたりプレイヤーは、もしなし得るならば、いずれのプレイヤー側からもドロップ・キックしてよい。しかし、相手側の一人は彼に木の自分自身の側に行うように強いることができる。

事実、ラグビー校のグラウンドの真中のタッチ・ラインのすぐ内側に三本の大きな榆の木があった。第24条は、ボールがキックされて木の中に入ったら、同一のプレイヤーがボールを再び獲得したかのように聞える。これらの榆の木は1893年に無くなった。

#### 第32条

すべての試合は、もしゴールへのキックが成功しなかったならば、五日後に或は三日後まで延引される<sup>33)</sup>。

1846年までに、他の二つのラグビーの基本的な特徴が発展した。つまり、H状のゴール・ポストとクロス・バーの上をボールが通った場合に得点を与えるという方法である。しかし、それらは、極めてささいなことであった。ラグビーのゲームが持合せていたものはスクラムであった。

ヒューズは、スクラムについて次のように述べている。

ボールは今、地面に落ちたばかりで、プレイヤー達は素早くそのまわりに集ってスクラムを組む。こうなるとボールは力かスキルで押し出さなければならない。生徒達がどんなにさまざまなやり方でこれに当たてくることか。二人の頑丈な生徒がまわりにいる連中を突破してやってくる。二人はボールを反対側に押し出そうとする決意も固くスクラムのど真中めがけて一直線に突入する<sup>33)</sup>。

スクラムはプレイの単なる再開法ではなかった。つまり、スクラム自体が、全体のポイントであり、目的であった。スクラムは現在のよう

な低い姿勢で激しく押すと言ったものでなく、非常に数多くのプレイヤー<sup>39)</sup>が密集して、直立し、ラグビー校で「ナビーズ」としてよく知られているつま先に鉄のびょうのついた靴をはき、ハッキングで前進して行くときに生ずる苦痛に対する粗野な勇気と平然とした無関心さを試す野蛮なテストであった。

1896年にラグビー・フットボールなる書を著わしたロビンソンは、ハッキングについて、當時を回想して次のように記している。

このハッキングは、ラグビーのゲームの最も悪い特徴であった。一つの点では役に立った。というのはハッキングがないとボールがスクラムから出て来なかったからである。ハッキングはラグビー校で始ったと思われる。ラグビー校のハッキングは、事実、すさまじい性格を持っていた。相手の脛を激しく蹴って、男性らしく罰を受けるのがラグビーのプレイの究極の目標であり、目的であった。二人のプレイヤーが、スクラムが解かれ、ボールやフォワードがグラウンドのもう一方の陣地に行ってしまったあともずっと互いに脛を猛烈に蹴り合っていた。個人的な諍いは、このような荒削りの方法で収まることが、時々あった。もちろんのこと、彼等の昔の勝利を過去の朦朧とした霧を通してしか見ないために、心地よい記憶しか呼び醒まさない年老いたフットボールのプレイヤーたちは、いまだに、ハッキングのシステムは危険でもなく野蛮でもない喜んで同意する。しかし、これは、ただ単に、不合理であるとしか言えない。多くのラグビー校のOBは、昔の野蛮な規則の下で受けた傷の名残りであって、今日いまだに存在する傷跡を示すことができる。極めて頻繁に事故が起っていたこと、そして事故のほとんどはハッキングによるものであったことは疑いがない。ラグビーをブルータリズムからサイエンスにした最初のステップは、スクラムの中で相手の脛を蹴ったり又はボールを持って走っているプレイヤーを潰<sup>39)</sup>かせるといったシステムを廃止したことであった。

ロビンソンが記したことが、誇大化されているように思えるならば、あるラグビー校のOBによる、1850年代後半にプレイされたゲームについての記事がある。彼はそれを1860年に記述しているので、彼の記憶は新鮮で、イメージは鮮明であったであろう。この中で、彼は当時のゲームとその二～三年前の自分の学生時代のゲームとの相異を比較している。彼の書いた事柄は1846年の脱野蛮の規則の導入のあとでさえ、ゲームの乱暴さは続いていたことを一応正確に評価しているものと考えてよい。

全く、二年前のあの第六級生の試合のスクラムを見せたかった。あの時は、皆は、ボールがハッキングの巧い口実になる場合のほかは、ボールのことなど全く気にもしなかった。ある時のスクラムはよく憶えている。……我々はもう五分間もハッキングし通しで、それでもまだ十分と言うには半分にも足りず、事実、蹴られた脛もやっと膨れ始めたばかりだった。その時、一人の見物人が親切にも、ボールが密集の上に集って誰かがとるのを待っている、と教えてくれた。

この時、最上級チームの腕利きのハック、フーキー・ウォーカー (Hookey Walker) がやってきた。いやはや、彼はスクール側をやっつけたものだ！10人をそのシーズン中沈黙せしめたし、6人をこの試合の途中で帰宅させただけだったが、彼がスクラムを突破するのを見るだけで、婦人達が悲鳴をあげて気絶する合図になるくらいであった。親愛なる諸君よ、神の恵みのあらんことを、今では皆がこともあろうにスクラムを見物するのを楽しみにしている。

我々には、不面目の上塗りだ。しかも、當時は、今日見られるような小手先のずるいプレイは全くなく、次から次へとパスをするプレイもなかった。全部男性的で真正直だった。だって一旦、スクラムに入ったあとでボールを放すのは、オフ・サイドの時にボールを拾いあげるのと同じくらいに目に余る、フットボールのルール違反と考えられていたものだ。

また、今日ではいつも行われているようなスクラムの外側にのがれるようなこともしなかった。試合開始10分後に頭の高さから爪先まで土まみれになっていなかったら誰もが諸君を無能だと考えたものだ。だが何と云うことだ。今日では、人並みに倒れるチャンスもない。若い洒落者が「どんなことをしても立ち上がり」、ラグビー・グラウンド中をちょこちょこ歩き回り、彼等の繊細な体格がボールとの乱暴な接触に耐えられないような様子をしているとしても、これまた不思議ではない。

こんな生意気な若者なんか首を吊してしまえ！そのうちに、礼装用の靴をはき、薄紫色の小山羊の手袋をはめた連中がプレイするようになるぞ。私の格言は、ボールが近くに來たら蹴って前に出る、ボールが近くになかったら、そう、その時は隣の男の向脛を蹴るというものだ。<sup>(41)</sup>

上記のことは、ラグビー・フットボール協会<sup>(42)</sup>が創設されるほんの12年前、その発祥地であるラグビー校でそのゲームが行われたやり方を記述したものであった。

#### IV 19世紀後半

しばらくの間、ラグビー校以外の校やオックスフォード、ケンブリッジの大学では、様々な形態のフットボールが行われていた。1860年代になると、それら様々な形態のフットボールをまとめて、統一規則を制定するといった重要な試みがあった。これに促されて、1863年末近く、フットボールのゲームの統制のための明確な規則を制定するための一連の会合が全部で六回にわたってロンドンで開催された。1863年10月26日、フリーメイソンズ・タヴァーン<sup>(43)</sup>において最初の会合が開かれ、ロンドン地区にある11のクラブや学校の代表が集まり、フットボール協会<sup>(44)</sup>を創設した。

しかし、フットボールのゲームの統制のための明確な規定を制定するのは失敗した。ラグ

ビーのゲームの支持者は、ハンドリング、クロスバーの上をボールが通った場合に得点を与えるという方法、とりわけ、ハッキングを認めるよう主張したが、アソシエーションのゲームの支持者はこれらすべてを拒否した。この二つの様式には相入れないものがあり、1863年よりアソシエーション式とラグビー式のゲームとの規則の裂目が生じ、両競技方式の特徴が近代まで発展してきた自然な記念すべきスタート・ラインを画した。

前述のロビンソンは、さらに、次のように記述している。

1865年にはロンドン近郊では、ラグビーを行うクラブでは15~20しかなかった。ほとんどすべてのチームは、ラグビー校とマールバラ校<sup>(45)</sup>において、そのゲームを学んだOBから構成された。例えば、1865年のリッチモンド<sup>(46)</sup>のチームは、ラグビー校とマールバラ校のOBで構成された。規則は極めて不明確な状態であった。ゲームが始まる前に両チームのキャプテンが会って、規則についての細い点を決めることがしばしばあった。ロンドン周辺のグラウンドには仕切りといったものがなく、見物人は、勝手気儘にぶらぶらしていた。事実、抜け目のないハーフは、群集を利用して相手を抜いていったので、相手バックはそのプレイヤーがどこにいるのか見つけることができなかった。プレイヤーの人数は、確かではないが、普通、一チーム、20名で構成された。オフサイドの規則は、そう厳重でなく、ボールを持って走っているバックのプレイヤーを保護するためにフォワードのプレイヤーを前衛部隊（advance guard）として用いるクラブが若干あった。この事実は、むしろ、興味深いことである。というのは、アメリカ人は、それと同じプランを採り入れ、決してそれを変更しなかったからである。アメリカン・フットボールでは、ボールを持っているプレイヤーを保護するのが、最大重要事であるので、この目的のため、彼等は、フォワードをカバーするウェッジやラインなどのシステムを考案した。スクラムは長

時間の退屈な、激しく押し合う勝負であった。プレイヤーたちは、頭を下げずに、真直ぐに立って相手の脛を蹴りながら闇雲に前進して行った。

しかし、そのようなことは長続きしなかった。1871年にラグビーフットボール協会が創設されたが、最初に行ったことは、ハッキングとトリッピングを禁止したことである（実際問題として、それらを廃止するには、むしろ長い時間がかかった。）最初、その変更は、ある一つの点では、ラグビーのゲームを悪くした。ハッキングの効果が無いので、スクラムが長く続いた（そして、それらは、決してスピーディなことではなく、1871年以前でさえ、見物人はポケットから時計を取り出して、スクラムの時間を測ったものである）。マクドナルド卿は、1908年のエジンバラ・アカデミカルの記念祭のディナーでの演説において、1880年代にラグビーが行われたやり方について、回想して次のように記している。

本当のスクラムというのは、ほとんど見ることがなかった。彼等は、干し草が湿っている時に積み上げられた干し草の山から煙か蒸気があがるのを見たことがあるか？ それに、正に、当時のスクラムであった。スクラムは、ほとんど静止して動かなかった。

上記のことは、あまりexcitingには聞えない。事実、それはあまりexcitingではなかった。ラグビー・フットボール協会が1871年に採り入れたゲームは、見物人は言うまでもなくプレイする者に驚異であることを持って、極めて多くのことを悪くした。

1970年、ラグビー・フットボール協会がその100周年を向かえ、その祝典を祝うためにXXクラブと呼ぶチームを編成した。それがXXであるというのは、1871年のラグビーのゲームの規則に準じ、1チーム20名のプレイヤーで模範試合を行ったからであった。しかし、それらのゲームは退屈なものであったようである。40名のプレイヤー達がフィールドの中で混雑し、攻

撃は、すぐに、アウト・オブ・スペースになり中断した。スクラムでは、双方のチームからの14名のフォワードが、組み合わせるので、ボールが出て来るまでには長い時間がかかった。多くの混雑、混乱があり、しかも2名のキャプテンが、自からレフリングしたので、プレイは流動性のないものであった。

## V まとめ

ラグビーは、初期には、非常にすさまじいゲームであった。現在でも、そのことは理解することができる。結局のところ、規則に対してなされた多くの変更のすべては、ゲームをよくするためのものであった。ボックスのプレイヤーが「おくびょう者」という烙印を押されるのを恐れ、あえてパスしなかったボールを辛抱強く待っている間、試合のほとんどの時間を闇雲に、スクラムで相手を持上げたり、引張ったりすることに費やしたそれら初期のフォワードのプレイヤーの開拓的な労作に感謝すべきであろう。

## 註、引用・参考文献

- 1) Rev. F. Marshall
- 2) Rugby, 英国イングランド中部, Warwickshire州東部の都市ラグビー市にあるパブリックスクール。1567年創立。
- 3) O. L. Owen, The History of the Rugby Football Union, Playfair Books, 1955, p.15.
- 4) Sub-committee of Old Rugbeian Society ラグビー校OB会が、H. F. Wilson, H. H. Child, A. G. Guillemard, H. I. Stephenの4氏を委員に推挙して、母校のフットボールの歴史を調査するように依頼した委員会。
- 5) Victorian Age
- 6) harpastum サイドライン、ゴール・ラインを明示してある競技場でなされた。そのゴールは、ポストで標示されていた。競技者は各組27人でローマ軍隊兵法院に於て組織されたのである。得点はゴール・ラインを横切ってボールを蹴ったり運ん

- だりして上げられる。
- 7) Sir William Beaumont
- 8) Bristol 英国イングランド南西部, Gloucestershire州南部。
- 9) Gloucester 英国イングランド南西部, Gloucestershire州の州都。
- 10) Derek Robinson, *Run with the Ball*, Willow Books, 1984, p.11.
- 11) Ibid., p.11.
- 12) Shrove Tuesday Football 217年, 英国人がローマ軍をチェスターから撃退したことを記念して行われるようになった。
- 13) Chester 英国イングランド北西部, Cheshire州の州都
- 14) Derby 英国イングランド中部, Derbyshire州の州都
- 15) Nemphett Thrubwell
- 16) Somerset village
- 17) Middlesex Sevens ラグビーのミドルセックス7人制大会。ミドルセックスは英国イングランド南東部の旧州。1965年に大部分がGreater Londonに残りの部分がSurrey, Hertfordに吸収された。
- 18) Robinson, op. cit., p.12.
- 19) Thomas Hughes (1822-46) 英国の小説家。
- 20) Owen, op. cit., p.26.
- 21) Thomas Hughes, *Tom Brown's Schooldays*, (ed. 1906), p.74, quoted in Marples, *A History of Football*, Secker & Warburg, 1954, p.115.
- 22) Ibid., p.115.
- 23) Ibid., p.115.
- 24) Ibid., p.115.
- 25) Ibid., p.115.
- 26) Levee of Bigside ビッグサイドの朝の会。
- 27) *The Origin of Rugby Football*, Report of the Sub-committee of the Old Rugbeians Society, 1897, App. A, 28-32. quoted in Owen, *The History of the Rugby Football Union*, Playfair Books, 1955, App. p.332.
- 28) fist-punting
- 29) Westminster 英国Greater London中部の一行政区画にあるパブリックスクール
- 30) Owen, op. cit., p.333.
- 31) Ibid., p.333.
- 32) Ibid., p.333.
- 33) Ibid., p.333.
- 34) Ibid., p.333.
- 35) Ibid., p.334.
- 36) Thomas Hughes, *Tom Brown's Schooldays*, (ed. 1906), p.73. quoted in Marples, *A History of Football*, Secker & Warburg, 1954, p.115.
- 37) Navvies 土方靴。
- 38) B. Fletcher Robinson
- 39) Robinson, op. cit., p.16.
- 40) the Sixth Match
- 41) *The New Rugbeian*, vol. III, 1680. quoted in Eric Dunning, *Barbarians, Gentlemen, and Players*, Martin Robertson, 1979, p.95.
- 42) Rugby Football Union
- 43) Freemason's Tavern
- 44) N. N. ( Kilburn ),Barns, War Office, Crusaders, Forest ( Leytonstone ), Percival House ( Blackheath ), Crystal Palace, Blackheath, Kensington School, Surbiton, Blackheath Schoolの11のクラブや学校。
- 45) Football Association
- 46) Marlborough 1843年に創立。
- 47) Richmond
- 48) Robinson, op. cit., p.18.
- 49) Sir J. H. A. Macdonald
- 50) Edinburgh Academicals
- 51) Robinson, op. cit., p.18.
- 52) U. A. Titley, *Centenary History of the Rugby Football Union*, Rugby Football Union, 1970, P.179.
- 53) Robinson, op. cit., p.19.